

# 短歌の魅力、ことばの魅力

俵 万智

こんにちは俵です。こうやって若い人の前でお話するのはとても久しぶりなので、今日は何かいい出会いがあるといいなと思ってやってきました。神奈川で、教員をしていた頃は、町田に住んでいましたから、今日は小田急線に乗って本当に懐かしい感じがしました。歌を作る時というのは、特に机に向かって考えたりということばかりではなくて、道を歩きながらとか、電車に乗りながら、八百屋さんで買物をしながら、そういう毎日の暮しの中でアッと思うようなことがあったら、それが何か心の揺れというか、そういうのが種になって歌は生まれてきます。

久しぶりに小田急線に乗って、かつて作った『サラダ記念日』の歌などを思い出したりしました。

君の待つ新宿までを揺られおり小田急線はわが絹の道

会うまでの時間たっぷり浴びたくて各駅停車で新宿に行く

町田は、急行だと三十五分ぐらいで新宿に着くのですが、約束の時間に向かって電車で揺られている時間は、私自身すごく好きなので、わざわざ各駅停車に乗って行ったり、そんな時のちょっとした想いを表した歌なのです。

どうしても海が見たくて十二月ロマンスカーに乗る我と君

これは逆に江ノ島の方へ行くロマンスカーですが、ちょうど今十二月ですから、ああ懐かしいなと思いました。

私自身『サラダ記念日』の歌を作った頃はずっと町田に住んでいたものですから、そういうヒントになるような言葉が色々出てきて、以前お手紙をもらったことがあります。「この人はどこに住んでいるのか私は推理しました。まず小田急線沿線なのは間違いない。しかも橋本高校に通いやすいところである。その上東急ハンズがある。住宅展示場がある……」歌集に散りばめられた言葉から、「結論として、彼女は町田に住んでいる」というふうなことだったので、

それは正解なのです。そういう身近なところから、自分自身は歌の種になるようなものをすくい上げるように作っています。

ただ、冒頭にこんな話をしてしまったので、なんだあったことそのままではないかと思われる人も多いかもしれないのですが、作品にする時はあったことそのままではないのです。今挙げた例はたまたま自分の日常とかなりダブる部分の多い歌ですが、必ずしもそのままの固有名詞やそのままの風景で三十一文字に着地することばかりでもありません。よくインタビューなどで、「あなたの歌は、あれは全部本当にあったことなですか。それとも人の話を聞いたたりして、頭の中で考えているのですか」というふうな質問が大変多いのです。

私は、全部があつたことそのままではないけれども、全部が嘘ということもまずなくて、初めの心の揺れというか、アツと思う気持ちというのは、本当に自分の日常の中から捕えて来なければ嘘だと思いません。ただ、それを言葉として表現する時には、より本当のことを言うための嘘というか、より本当に近づくためには切り捨てなければいけない部分もあるし、膨らませることによってより本当のことが言えることもある。ですからいい意味での嘘も沢山ついています。以前、新聞記者の方に、

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

という歌について、「この七月六日というのは昭和何年の七月六日ですか」と聞かれ、「その日の新聞をあたってみたら何か新しいことが発見出来るかもしれない。その日の新聞に《きょうのおかず》

といって何かサラダというのが出ているかもしれない」、そういうふうに言われてとてもびっくりしました。自分がちょっと工夫して作ったものを食べてもらって、おいしいねと言われた時にすごくうれしかった。今日を記念日にしよう。そういうのが恋というものではないかな、それが初めの心の揺れだったのです。ですから、日付としては十二月二十四日とか、二月十四日とか、あるいは誕生日とか、そういう放っておいても記念日になるような日は避けようというふうにまず思いました。そういう意味で日を選んだのと、それからサラダのおいしい季節というか、生野菜がバリバリしてきて、野菜が新鮮でうれしい季節というのは初夏の感じかな。それから七月のS音とサラダのS音が響き合っているかな。ちょっと仕掛けといえれば七月七日の七夕の前の日というのでもいいかな。そんな想いで七月六日という日にちに落ち着いたのです。ですから、本当にあつたことをそのまま日記のように付けていたのでは歌としてうまくいかないことも結構あります。

それから、アツという心の揺れが本当だったら色々なふうに膨らませられる。例えば、

見送りのちにふと見る歯みがきのチューブのへこみ今朝新しき  
という歌を作ったことがあります。これは種を明かすと、実は学生の時に父親が出張で私の家に泊まった時、——ご存じかしら、サンスターの綿模様が出てくるハミガキがあるのです。——私はそれを愛用して、最後まで綿模様がでてくるように工夫しながら使っていたのですが、何も言っておかなかったので、父はまん中をグッと押

してしまつたのです。父が会社に行つてからそれを見たら悲惨なこ  
とになつていて、あーと思つたのです。でもその時に、グッと残つ  
ている親指の跡、そこに何か存在を感じるといふのはちょっとおも  
しろいなと思つて、それを形にしていつたわけです。その結果、非  
常に色っぽい歌が出来て、初めはちよつと腹が立っていたのですが、  
歌が出来たからいいかと思つて父を許したのです。それで歌集に入  
れる時は、「恋の歌」の中に混ぜてしまつたのです。その歌の前と  
いうのは、

君を抱くティンカーベルになりたくてパールピンクのフラット  
シューズ

という歌があつて、次にその歌を置いたわけですが。そうするとこれ  
はもうどこから見ても後朝ごあすなの歌というか、そういうふうに見えてき  
て、歌というのは置く場所によつて見え方が随分変わってきます。

皆さんは歌集を読む時はどうですか。やっぱり前から順番に読ん  
でいくと思うのです。パアッと開いたところを読むという人、もち  
ろんそれでもいいのですが、やはりずっと並んでいる場合は一首目、  
二首目、と順々に読んでいくと思うのです。ですから、私自身はそ  
の並べ方をすごく大事にしたいのです。それで、大変な機械音痴な  
のですが、その歌の並べ替えがたちどころに出来るというので、ワ  
ープロを習い始めました。初めは歌を一首、一首書いて、切つて、  
洗濯ばさみで止めたりしていたのですが、五十首にもなつてくると  
何が何だか分からなくなつてしまつて、そのためにワープロを使い  
始めました。

短歌との出会いについては、私自身作り始めたのがちよつと皆さ  
んと同じぐらいの時です。大学で佐佐木幸綱先生の講義を聴いて興  
味を持ちました。ただそれは短歌ではなくて一般的な文学の話で、  
私は初めその人が歌人であることも知らなかつたのです。佐佐木何  
とか綱という人が教科書に出ていたなと思つて、何か引つかかつた  
のですが、それは佐佐木信綱という歌人で、その人の孫に当たる人  
でした。とにかく格好のいい先生で、私もその頃、いわゆる歌詠み  
というところ、着物を着て、短冊か何かに書くという古いイメージを持  
つていたのですが、全然そうではなくて、黒の皮のコートみたいな  
のを着て、サングラスを掛け、恰幅がよくて、その頃、早稲田の梅  
宮辰夫と言われてとても人気のあつた人なのです。話も面白くて、  
先生に憧れてしまつたのです。それでもつと先生の書いたものを読  
んでみたいなと思つて探したら歌集がありました。その歌集という  
のがすごく面白くて、私自身がそれまで見た短歌とは全然違いまし  
た。昔ラグビーの選手だつた人なのですが、ラグビーをやつて男の  
汗がパァーッと感じられるような歌とか、あるいはちよつと悲しい  
恋の歌とか。私が特にいいなと思つたのは恋の歌で、例えば、

なめらかな肌だつたつ若草の妻と決めてたかもしれぬ掌は

「若草の」というちよつと古い枕詞がかえて新鮮だし、「妻と決  
めてたかもしれぬ」というところがなかなかかわいくていいなと思  
つたり、あるいは、

泣くおまえ抱けば髪に降る雪のこんこんと我が腕に眠れ

そういう映画のワンシーンを見ているようなドラマチックで格好いい男っぽい恋の歌が沢山あって、ああこんなふうに、短歌というのは自分の表現として今も生きているもののだなと、先生の歌で知ったように思います。先生の世界というか、イメージや、ふだん思っていることや、言葉が、その三十一文字の中で本当に生きていて、まさにこれは佐佐木幸綱だなというような歌だったので。

こんなふうに、短歌は表現手段として今も非常に魅力的なもののだということを発見出来て、それで私自身もおおずと作り始めるようになりました。五・七・五・七・七というのは本当に短くて、アツという間ですから、「そんな短い言葉で自分の想いのだけが表現出来ますか」とよく聞かれます。私自身はその短さというのが魅力の一つだと感じています。何文字でもいいよと言われてたら、幾らでも、次々と言葉を並べることは出来るかもしれないのですが、たった三十一文字と言われたら、何がその中で一番大事な言葉なのだろう、自分は何を一番残したいのだろうか。中ぐらいい言いたいことやちょっと言いたいこととか、無駄な言葉というのは全部落とすといかなければいけないのです。そういう作業の中で、自分のコレという言葉を見つけてくる、残していく。この短さというのは、言葉に対して厳しくなれる面があると思います。

もう一つの大きな魅力はリズムです。五・七・五・七・七というこのリズムは、本当に理屈ぬきに言葉を輝かせてくれる。なぜ五でなぜ七なのかは本当に説明が付かないのですが、私はそれを魔法の杖と呼んだりするのです。本当に自分が日常に使っている言葉が、このリズムに乗ると急に生き生きと輝いて見える。何か魔法の杖で

サツとなぜられたように見える。それは本当に日本語に力を与えてくれるリズムなので、やはり歌を作る者としては、そのリズムの恩恵を受けない手はないというふうに思っています。歌謡曲とかコミーシャルなどでも五七音のものは、心にスルスルと入っていきやすいというか、大体ヒットするものというのはそのリズムが背景にあるらしいのです。

よく「五・七・五・七・七の堅苦しい定型をバァーッと破ってみたいと思いませんか」などと言われるのですが、バァーッと破ってしまったらそのリズムが崩れてしまう。そうすると折角短歌を作っているのに、リズムが崩れたところで言葉をつないでもちっとも魅力的なものにならないのです。ですから、私は割とおおらかに、短歌のリズムの素晴らしさを信じるところから出発して歌を作りたいなと思っています。

ただ、どういう言葉を使うかについては、今でも文語だけで歌を作っている人も沢山いますが、私自身はやはり今自分が生きているという感覚は、今の自分の言葉でないと表現出来ないと思うし、その方が自然だなというふうに感じていきます。

例えば、源氏物語は素晴らしい長編小説です。あれはあれとして、本当に素晴らしくて、今も読んで面白い。だけど今小説を書く人が、「いづれの御時にか……」などというふうには書いてないです。単純にいて、それと同じことではないか。今の自分の思いを表現するためには、やはり今の自分の言葉で、カタカナなども沢山使っている……。「短歌にカタカナですか」などと言われるのですが、「朝起きるから夜寝るまで、今日一日カタカナを使わないで生活してごらんなさい」と言われたら多分出来ないと思うのです。これは、やっぱり

りコップとしか呼べないし、これはマイクです。そういう意味で、カタカナだからといって差別するのは何かカタカナがかわいそうで、同じように自然に歌の中では使っていきたいなと思っています。

私が、短歌と出会ったのは、佐佐木先生との出会いがあったからで、じゃその格好いい先生が俳句を作る人だったら俳句を作っていたのだから、詩を書く人だったら自分は詩を目指していたのだからかと思うと、ちょっと恐いような不思議なような感じがしますが、やはり、自分が短歌と相性がよかったのだからなというふうに感じます。初めはたまたま本当に偶然なのですが、偶然で終わらせる場合もあるし、偶然で終わらせないで、自分の中の必然に変えていく場合もあると思います。私と短歌の出会いには初めは偶然だったのですが、その出会いから自分にとってもう引き返せないような大きなものになってしまった。ですから、沢山の偶然の中からどの偶然を自分に引き付けていくかということで、結局自分がそこに出来るのではないかと思います。

私自身言葉というものが本当に好きで、これもなぜというのが説明出来ないのですが、言葉の面白さというのはずっと心の中にあつて、何か言葉で表現したいなという思いがあったのです。それで短歌に出会うまでを振り返ってみると、高校時代はずっと演劇をやっていました。それも演ずる方だったのです。それは、ただ戯曲を読んでいる時には見えてこないものが、自分の声に出して、何回も何回も覚えるまで声に出してみると、ある日バアッとその言葉の意味が見えたりする、そういう面白さがありました。

私の高校時代、十何年前の高校生にしては割とませた高校生だったと思うのですが、つかこうへいさんとか、清水邦夫・別役実、そ

ういう人達の戯曲がすごく好きで、理屈抜きにドキドキするような言葉というのに、戯曲の中で出会いました。

清水邦夫の戯曲の扉に「泣かないのか／泣かないのか／一九六〇年のために／僕らは生まれ変わった木の葉のように／無力なギリシヤへ出かけよう」というのがある。一九六〇年の意味も分らないし、何で無力なギリシヤなのかも分らないけれども、何かその言葉を口に出すだけでドキドキしてしまう、そういう体験がありました。

それから大学生になって、学生になっても芝居をやるうかなと思つたのですが、その頃は、言葉で表現するよりも身体で表現する芝居の方が主流だったので。私自身は、身体で表現するのは自分は向いてないなというふうに思いました。本当に運動神経は鈍くて、今だに逆上がりも一回も出来たことがないのです。それぐらい運動神経が鈍いので、身体を使う表現は自分には合っていないと思つて、演劇から身体部分を抜いたようなアナウンス研究会というサークルに入りました。そこでは日本語の美しさを研究するというのが触れ込みで、朗読や、ディスクジョッキーの真似ごとをしたり、みんなでラジオドラマを作ったり、そういうことをするサークルでした。それもなかなか面白くて、やはり言葉で何かを伝えるということに興味があったのだなと思います。

そこでは結構面白いアルバイトなどもあって、高田馬場の駅のアナウンスとか、六大学野球の場内放送とか、あるいは選挙の時のウグイス嬢、白い手袋をはめて候補者の名前を連呼するとか、それはそれでなかなか面白かったです。今でも駅に行くと、今はほとんど機械になっているのですが、たまに人の声でやっているとうまいなと思つたり、ちょっと下手なんじゃないかと思つたり、チェックし

ながらホームに立っています。「どれだけうまかったの」と思うかもしれませんが、ちょっとやってみましょうか。

「高田馬場です、一番線池袋・田端・上野方面行き到着です。電車が止まりましたも降りる人が大勢います、ドアの前はひろくあけてお待ちください。二番線新宿・渋谷・品川方面行きドアが閉まります。駆け込み乗車は危ないのでおやめください」。とまあこんなふうに。拍手までいただいてしまってますみません。

やはりこの言い方一つで随分駅のホームの混みぐあいが変わってくるのです。朝眠いなと思つて、いい加減にマニュアルどおりに適当にやっていると、だんだん駅の混雑が激しくなってくる。ものすごく目を光らせて、「階段付近の方お急ぎください」とか「三两目の方、身体引いてください」とか、見ながらビシビシ言っていくと、何か整然としてくるのです。慣れない人がやるとだんだん混んで来る……やっぱり言葉の力つてすごいなと思つて、そういう面白さもありました。

ただ、選挙のアルバイトはちょっと恐いなと思いました。初めアルバイトで選挙カーに乗った時というのは、何だみんなあんな一生懸命な顔をしていて実はアルバイトだったんだと、ちょっとがっかりしたのです。「最後のお願ひに上がりました」とか言つても、あれもアルバイトなのだと。けれど実はそれはただお金をもらっているからではないのです。私自身も同じ人の名前を一週間、毎日毎日何時間も繰り返し呼んでいると本当に情がうつつて、どうしても当選してほしいという気持ちになってしまいました。たまたまそこに配属されただけで、主義主張があつて応援に来たわけではないのに、名前を呼んで、自分が言葉を繰り返すだけで、心まで移ってしまう

のはちょっと恐い。ですから、最後のお願ひと言つて涙しているのはあれは嘘泣きではないのです。嘘泣きでないことの方が恐いなと自分自身は感じました。

そんなふうに自分自身を振り返つてみると、何か言葉で表現したという思いがずつとあつて、その中で短歌と巡り合つて、これが一番相性がいいなというふうに感じたのです。その違いというのは何かと思うと、お芝居もアナウンスも、表現するものを外から与えられて、それを如何に伝えるかという作業、もちろん芝居などはそれ以外の面もあるのですが、基本的にはそうかなと思つたのです。言葉を外から与えられて、それをいかに伝えるか。自分がその通過点にあるような気がして、何か自分の内側からの言葉を発信したいなという感じがあつて、それが短歌と自分が結びついた一つの理由かなと思います。

ただ、言葉ということに関わるのであれば、今のところ自分は短歌と一番相性がいいなというふうに思つてはいるのですが、色々なことをやってみてもいいなと思います。誰の心の中にも何かを表現したいという思いが必ずあると思うのですが、その相性のよいものに巡り会うというのがすごく大事なことではないかと思ひます。絵を描く人は色や形や、絵画で自分の中にあるものを表現する。写真を撮るカメラマンはカメラでどういう場面を切り取るか、自分は何を写真に撮るか、カメラという機械との相性がよい場合は素晴らしい写真が撮れる。そういうふうに数限りなく表現手段というものはあるわけですが、その中で何が自分と相性がよいのか見つけるのがすごく大事なことで、相性が悪いのに続けていてもなかなかうまくいかないと思ひます。

私自身は、言葉ということに関われるのであれば色々なことをしてみたい。今度初めて戯曲を書いてみて、その台本で芝居をやらうとしています。本当は脚本を書いて渡して、もう後は演出家に任せてもいいのですが、今ほとんど毎日稽古場に行つて、演出家の後ろに背後霊のようにくっついて、口を出して喧嘩しているのです。なぜ芝居を書くというふうなことになつたのかというと、これも出会いなのです。つかこうへいさんの芝居は、学生時代、上京してきた頃から舞台はずつと見ていたのですが、直接本人に会うチャンスはずつとなくて、たまたまだったのです。つかさんの稽古は本当に面白くて口だてといつて口移しに役者にセリフを入れていくというちよつと変わった独得な方法なのです。つかさんが「お願いだから私を捨てないで」と言うと、それを聞いて役者さんが「お願いだから私を捨てないで」。つかさんが「うるさい何とか」と言うと、役者さんが「うるさい」そういう形でどんどん付けていくのです。それもつかさんの頭の中に何かが初めにがっちりあつてそれを移すというのではなくて、その役者を見て、アッ今こういう気持ちになつたなと思つたところでセリフを変えていく。ですから見ていると、そこで言葉がぶつかり合うというか、一つのセリフを投げて何人かの役者さんで取り合うということもするのです。それで一番リアルな言い方をした役者がそのセリフを取るといふ、本当に言葉の戦いの現場みたいな稽古風景で、私は「つかさんの舞台よりも面白い」と言つたら怒つていましたが、本当に出来上がった舞台よりも何倍も面白くて稽古場にずつと入り浸つていたので。「おまえさんそんなに芝居が好きだったら、見るだけじゃなくて自分でやれ」と言われて、そういう形でもう一回芝居に関われるのかなと思つた時はす

ごくうれしかった。自分の身体と声を使って演ずるところからはずつと離れてしまつたのですが、そういう形なら、自分の内側から言葉を発信するという形で芝居にも関われるなというふうにしてやり始めました、今、結構苦労はしているのですが。

短歌の場合すごくいいところは、歌を作らうと思つたら鉛筆と紙さえあれば出来るのです。カメラも、絵の具も要らないし、思い立つたら今日からでも出来る、たつた一人で全部出来る。そういう身軽さがあるのですが、芝居の場合は、自分が思い立つても、役者さんは要るし、スタッフは要るし、音響の人、照明の人、舞台という場所が要る。そういういろいろなものが要るので、急に思い立つても出来ることではないわけです。ですから、そういう場所を貸してもらえるのだつたら、これは滅多にないチャンスだなと思つて、本当に恐いもの知らずでやつてみようかと思つてやり始めました。ですから、書いた人だけ素人で、あと役者さんなどは皆プロということで大変奇妙な感じで今稽古が進んでいるのです。でも、短歌以外のことを色々やってみると、また短歌というものが見えてくるということもあります。言葉を使って何かを表現するという点では、戯曲も歌も大きな部分では共通なのですが、短歌は、作り始めて完成品にするまでたつた一人の作業なのです。それがお芝居の場合は、戯曲が出来たところがゴールではなくて、そこがスタートです。自分の作業がゴールではなくてスタートになるというのは、何かヘーッといふふうに思いました。また自分の言葉が生身の人間に語られるというのは非常に面白くて、自分が思つていた以上の色がついたり、膨らみが出たり、迫力が出たりということで、非情にベタッと寝ころがっている活字ではなくて、それがグーッと立ち上がつてくるよ

うな、そんな面白さがあって毎日稽古場に行っているのです。

それから短歌は千何百年前から日本にあるわけです。今私が万葉集を読むことが出来る。奈良時代の建物などは皆朽ち果てて、その頃にあった物は皆壊れ、その頃生きていた人間も皆滅びていなくなってしまう。でもその時に歌われた歌は、今私が読めば千年前の鮮度で蘇るわけです。短歌というのはすごいな。百年前のものも、三百年前のものも、全く色あせたり、古びたりしない、言葉というのはすごい生命力だ、言葉だけは永遠だ。短歌を作っている時というのは、千年前ともつながるし、百年後ともつながる、そういう感じを持っていたのです。

ところが芝居をやってみると、言葉はその日その瞬間になくなっていくものでもあるのだなとつくづく思います。毎日毎日稽古を重ねて、舞台は四日間あるのですが、その完成した言葉というのは、その日、その時、その場所でないと感じることが出来ないのです。私達の作っているもの、戯曲から舞台上がるまでに成長していったその言葉というのは、その日、その場で消えてなくなっていくものだと思います、何かゾォッとするような感じもしましたし、何と贅沢なことを自分達はやっているのだろう、一瞬で消えて行くもの、これだけ大勢の人が力を合わせてやっていくという、——消えてなくなってしまうからいいとみんな言うのですが——そういう生ものでもあるのだなと思いました。言葉は永遠に真空パックで取っておけるといふふうに、短歌を作っている時は感じていたのですが、そういう面ばかりではなくて、言葉は本当に次の瞬間に消えてなくなる生ものでもあるのだと、芝居と関わってみて改めて思いました。

また、不思議だなと思うのは、何か好きだと思っていると巡り巡

ってくるものだという事です。自分自身が表現としての芝居からしばらく離れていたのですが、好きだという思いがあって見続けていた。それがあの日フッとまた戻ってきて、こんな形で芝居に関わっているというのも不思議だなと思います。

それから巡るということでは、日本語を学問するという分野の国語学があります。私自身入学した頃は文学少女ではあったのですが、むしろそういう国語学にすごく興味があって、大学一年、二年の頃は、それで卒業論文も書くつもりで、言葉の講義ばかりとっていたのです。でも佐佐木先生に卒業論文を出したいという、不純にして熱心な動機で国語学をやめ、結局卒業論文を短歌のことで書いたのです。その頃、国語学が好きで随分熱心に勉強していたことが、今国語審議会に入って役に立ってきている。その頃国立国語研究所などに勤めたいと思っていたのですが、その研究所の人なども国語審議会に出てきていて色々話を聞いたりして、何か好きと思いつづけていると自然と巡ってくることもあるのだと思います。

ですから、相性がいいか悪いかというのとは色々なことをやってみないと分からないし、色々な出会いの中で、好きということが形になってくることもあるので、今、もしかして自分の表現方法が分からない、あるいは好きなだけけれども何かが違うと思うことがあったとしても、それは慌てないで持ち続けると、いつかゆっくり巡ってくるということもあるのではないかと思います。

題はすごく大きな題を付けまして短い時間の中でしたけれども、私自身が言葉が好きということ、短歌の面白さというか魅力が伝えられたらよかったなというふうに思います。

こうやって一方的に話してさようならというのは何か味気ないで、皆さん聞いてみたいと思うようなことがあつたら是非話し掛けてください。

——俵先生は大阪のご出身ということですが、方言の魅力というか、大阪弁などについてどう思われますか。

俵 私は生まれが大阪で、十四歳まで大阪にいて、中学・高校時代は福井、それから東京です。方言のよさというのは、言葉がまろやかになるというか、例えば、私自身福井県にいつてとても辛かったのは、大阪弁の敬語で何々してはるの《はる》が使えないのが、むずむずして気持ちが悪かったです。先生が《いらっしやる》と言うとちよつと仰々し過ぎるし、《いる》と言うとちよつと失礼だけれども、《いてはる》というとかちよつといいみたいいな……《はる》というのはその間なのです。方言の中にはそういうちよつといい人間関係を表す言葉というのが私は多いような気がします。やはりその土地土地で使われている言葉だからすぐくまく表せる、そういう微妙な中間的な色合いが面白いし、いいものだなと思います。

——先生は国語審議会で、若者のしゃべり言葉が乱れていると話されたニュースで聞いたのですが、最近の若者の言葉について、どう感じていらっしやいますか。

俵 私自身乱れているというふうには思わないのです。確かに色々な場面で揺れているなという感じはしますが、言葉は生き物ですから常に変化していくのが自然だと思うのです。

今一番象徴的に言われているのが、《ら》抜き言葉です。食べ

ることが出来るというのを、正確には《食べられる》と言うのですが、それを《食べれる》。皆さんどうですか。

この間そのことで子供に色々聞いた中で、アツと思ったのは、小学生ぐらいの子ですが、

「このリンゴを食べることが出来るかどうか言うの」と聞いたら「食べれるだよ」。「食べられるって言わない」かと聞いたら、「食べられると言ったら、僕が食べられちゃうみたいだよ」。

それを聞いた時にその感覚は正しい、二十一世紀を担う子供がこう感じているのだったら、これは時間の問題で、多分 possible の意味は《食べれる》《見れる》になっていく、そういう流れなのだろうなと思いました。

ですから、今日本語がどういう状況にあるのかということを経験診断のように調べて、そういう診断書を皆さんに見てもらおうというのも国語審議会の役目ではないかと思っています。言葉というのは個人のものだし、それを上で決めてこう話さないと言っても大きなお世話なわけです。いつの時代でも若い人の方から言葉を元気にさせていく、こつちで渋い顔をしてる大人がいるというのが、普通の状態だと思うのです。それが乱れているというのではなくて、それは言葉が生きているという状態ではないかと思っています。

(平成五年十二月十五日、於第二十八回文芸学会)